

高等学校 国語科学習指導案

指導者 古田 尚行

- 日 時 平成 28 年 10 月 15 日 (土) 第 1 限 (9 : 30~10 : 20)
- 場 所 第 1 研修室
- 学年・組 高等学校Ⅱ年 5 組 42 人 (男子 22 人, 女子 20 人)
- 単 元 存在の証明をめぐる―「忠度の都落ち『平家物語』」
- 目 標
1. 人物や情景の描写をとらえ、古文の基本的な読み方を理解する。
  2. 作品に語られた人物関係や心情を理解する。
  3. 「自己」と「他者」についての認識を深める。

授業について

「忠度の都落ち」は多くの教科書に採録され、「木曾の最期」と並ぶ定番教材である。薩摩守忠度は歌の師である藤原俊成のもとへ行き、自らの和歌を託して都落ちしていく。決意を新たにして都落ちしていく忠度と涙ながらに彼を見送る俊成との対比された場面は読者の印象に残るものである。なお、古態としての延慶本『平家』では俊成は対面せずに門越しに忠度の話を聞いたとあるが、覚一本『平家』の語り手はそのようには語らずに師弟の情愛の物語を強調して再構成している。

忠度の「生涯の面目」は勅撰集への入集であった。このことはさらに深めていくと、忠度にとってこの世に生を受けた自らの存在の証明、つまり自分が生きているという証、記憶を他者に託していくことでもある。そしてそれを受け取る俊成という他者の存在が可能にしている。

生徒の自己肯定感が低いと言われる時代である。自己とは何かを絶えず問い続け/問われ続けながらも自己を模索し、その自己を他者に託していくことは容易ではない。しかし、生徒はそのような物語を、たとえば「少年の日の思い出」で「彼」(客)から「私」(主人)、「山月記」で「李徴」から「袁儻」、「こころ」で「先生」から「私」という形で触れている。

本授業では「忠度の都落ち」等を参照しながら、自己と他者との関係性の問題を深め考えていく場を一つの「学び」の場として設定する。その時に指導者は学習者の思考をどのように広げ、つなげて、整理しながら教室での学びを深めていくのか、そしてそこでの学びをどのような形で教室を離れて実践していけるのか、そのことを考えてみたい。

評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
① 作品世界について、興味・関心を持って読もうとしている。	① 登場人物の関係を理解し、その心情をつかもうとしている。	① 難語句を調べ、その意味や用法を理解しようとしている。
② 作品世界の問題を今に引きつけて考えようとしている。	② 作品世界の「自己」と「他者」に考えを及ぼそうとしている。	② 古典世界における和歌の価値を理解しようとしている。

## 学習計画（全6時間）

次	学 習 活 動	評価規準と方法
1	古語の意味、文法事項を調べる。「忠度の都落ち」を読み、忠度、俊成それぞれの心情や考え方を整理する。（4時間）	関・読・知 行動観察・ノート・発表
2	物語全体を踏まえ、忠度と俊成についての考えをまとめる。（1時間）	関・読・知 行動観察・ノート
3	発表・応答。「忠度の都落ち」に見られる「自己」と「他者」の問題を考え、社会の中に見られる「自己」と「他者」についての考えを深めていく。（1時間）【本時】	関・読・知 行動観察・ノート・発表 資料・発表

### 本時の学習目標

1. 「忠度の都落ち」の中の「自己」と「他者」との問題を捉える。
2. 社会の中の「自己」と「他者」との関係性について問い深める。

### 本時の学習指導過程

学習活動	指導上の留意点	評価の観点と方法
1 物語の中の「自己」と「他者」について考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 忠度について注目させる。               <ol style="list-style-type: none"> <li>① 忠度にとって和歌とは何か。</li> <li>② 忠度は満足したのか。</li> </ol> </li> <li>・ 忠度の感想・評価の発表、応答。</li> <li>・ 俊成について注目させる（再度本文へ）。               <ol style="list-style-type: none"> <li>③ なぜ忠度は満足できたのか。</li> <li>④ なぜ俊成は勅撰集に入れたのか。</li> <li>⑤ 俊成は納得しているのか。</li> </ol> </li> </ul>	<p>本文の記述から人物の心情を踏まえた表現を理解しているか。行動観察。</p> <p>人にわかりやすい発表を心がけているか。行動観察。</p>
2 社会の中の「自己」と「他者」について考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 社会の中の「自己」と「他者」の関係の事例（自己と他者という関係が見られる例）を考えさせる（発表、応答）。</li> </ul>	<p>作品世界と社会との比較ができているか。</p>
3 本時のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「あなた」にとっての「他者」、「他者」にとっての「あなた」とは何かを考えさせる。</li> </ul>	<p>自分の問題として捉えなおそうとしているか。</p>

# 板書計画 1時間目

「忠度の都落ち」(『平家物語』)

忠度 宿所におはして見給へば、

「忠度。」

「三位殿に申すべきことあつて」

必死さ・ひたむきさ

「門を開かれずとも、

このきはまで立ち寄らせ給へ。」

〈門戸〉

対面

その内 騒ぎ合へり。

落人

忠度

その人ならば苦しがるまじ。

俊成

ことの体、何となうあはれなり

語り手

板書計画 2時間目

歌の師

忠度から俊成へ

〈世の乱れ〉

平家の運命はや尽き候ひぬ。

君 都を出でさせ給ひぬ。

名譽

生涯の面目

自分の和歌が勅撰集に入集

疎略に存ぜず（＝おろかならぬ御事）

〈世静まり候ひなば〉

忠度

草の陰

遠き御守りでこそ  
候はんずれ。

物 忠度の和歌

卷 さりぬべきもの候はば

俊成

板書計画 3時間目

俊成

死んだ人、  
別れた人を思い出すよすが  
かかる忘れ形見

a

「ゆめゆめ疎略を

存ずまじう候ふ。」

感涙 — ( )

< 浮き世 >

涙 — (後会期遙…)



思ひ置く  
こと候はず

a

喜んで

「今は西海の波の底に沈まば沈め、

山野にかばねをさらさばさらせ。」

馬に乗り

使役

甲の緒を締め、  
西をさいてぞ歩ませ給ふ。

指して

「前途程遠、馳思於雁山之暮雲」

高らかに口ずさみ給へば

〈西〉



忠度

板書計画 4時間目

〈そののち〉 || 世静まり候ひ 「ぬる」世

遠く離れた過去

俊成

忠度のありしありさま  
言ひ置きし言の葉

ふさわしい

さりぬべき歌…いくらもありけれど

勅勘の人なれば、「よみ人知らず」

勅撰集 || 千載集 (7番目)

人為

さざなみや志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山桜かな

自然

▽参考「春望」

うらめしかりしことどもなり

語り手

## 1、忠度(じゆつ)

都落ちして朝敵となっても、死ぬ前に最後の願いとして自分の歌を載せて欲しいと頼み、歌が載ることが生涯の面目であると考えているのは大変趣深いことだと思った。これからもうすぐ死ぬ身であるのに失望せず、思いは残ると考えている。

朝敵となり、死を目前としてもなお、自分の生きた証を残したかったのだろうか、和歌のことを考えている忠度には現代の私から見ればあきれられるが、そこまで入れ込めるものがあるのはうらやましい。

自分の武人としての身を危険にさらしながら歌人としての誇りを持って行動をしてきた様子が文中から強く感じられた。俊成と話し終えた後は武人として生きる覚悟を決めたと思う。

武士なのに歌を詠むのが上手いのが意外。せつかく良い歌を詠んだのに後世まで歌で名が残らずかわいそうだ。

## 2、俊成(しゆんせい)

落人であり、朝敵である忠度を信用して家に入れてくれて、優しい人だと思った。突然忠度が訪ねてきて、形見になるような歌を書いた巻き物を渡され、今生の別れを告げられたようなもので辛かっただろうと思った。

俊成は認められない忠度を認めてくれるいい人だと思った。俊成は、忠度が訪問してきた時と忠度が去る時、ともに泣いていたので涙もろいと思った。

弟子のことを大切に涙もろい(？) 忠度の歌の才能を認めているため、「よみ人知らず」で和歌を残していることをとでも残念がっている。

人生のどん底にいる忠度に対して自分ができることを頑張ってやっている姿、素敵だなあと思った。さすが忠度の歌の師。歌だけでなく人間性も優れていらっしやる。だからいい歌が詠めるのだ。

忠度が落人になったとしても、何もとがめず家にあげた俊成と忠度の間には深い絆があったんだろうと思った。また、都落ちした忠度にとって、人に会うのは、歌を和歌集に入れてもらいたいという強い思いがあっても、とても恥ずかしいことなのに、会おうと思える俊成は、忠度がそれだけ信頼して慕っている証拠だと思いました。

特に何も感じませんでした。和歌には非常に思い入れがあったんだろうなあ。忠度みたいに、戦で消えていく才能や作品のことを惜しく思っていたんでしょうか。当時の人だからそうでもないんでしょうか。「感涙」って書いてあったら、なんかただの熱い男だけど、たぶん忠度の姿が生き様と、これからの行く末に対して、切なく感じ

たり、辛かったりしたんだろうなと思います。歌集に載せることはできたけど、名前を書けないことを一番うらめしく思っていたのは彼だったのかなあ。

### 3、物語全体について

どんなに名歌を詠んでも平家という社会的立場によって千載集に名前を残せなかった忠度は残念だと思った。忠度と俊成の二人に共通する和歌への強い思いが印象的だった。

どれほどの文化人でも事情によってはそれを捨てなくてはならない時があること。また、文化人同士では彼らの状況にかかわらず、その間には共通して愛するものもとでは敵味方は関係ないということ。

忠度は平家の一門で武士でありながら歌の才能があった。が、朝敵となってしまったためにせっかくの歌が名前が残ることなく載ることになってしまった。時代が時代とはいえ、良い物が正当に評価されないのはむなしいなと思った。

一番不思議に思ったのが、忠度は主役として登場し続けているのに、忠度のその後が全く気にならないところだった。思い入れがないわけでも、簡単にだいたいの予想がつくわけでもないのに、なぜか気にもしようとしなかった。忠度がいさぎよすぎるのか……

もし自分の命があとわずかとなったときに忠度と同じように後世に名を残すために何かをするかもしれないと思った。

昔は今と違って、こんな心の葛藤があったんだなと思った。

今と昔の考え方の違いを実感した。歌に対する情熱、厳しい戦い、身分の重要性等、今では想像もつかないような考え方も多かった。しかし、平家物語が書かれた頃には、その一つ一つがとても大切で、かけがえのないものだったのだろうと思った。

忠度が大友皇子と自分を重ねて詠んだのかはわからないが壬申の乱に負けて自害した大友皇子と自身を重ねて詠んでいるのはとても文学的だと思う。またそれを俊成の功績により今も私たちがこれを詠んでいると考えると、大事なことは消えずに残ることなのだなと考えさせられた。

### 4、疑問点等

武士は誇りや名誉を一番大切にしているのがまさに、という感じの話だった。死んだら何の意味もねえよって思うんですけど、でもやっぱりそういうのかっこいいなとも思います。



## ■資料、参観用（別紙生徒配付資料に授業者が書き込んでいるもの）

### A、忠度について

①一門の滅亡と自らの死を覚悟してまでも、勅撰集の入集を果たしたいがために俊成のところを訪ねるといふことは、よっぽど歌人としての**願望**が忠度は強い人だなと思った。

②都落ちして朝敵となっても、死ぬ前に最後の願いとして自分の歌を載せて欲しいと頼み、歌が載ることが**生涯の面目**であると考えているのは大変深いことだと思った。これからもうすぐ死ぬ身であるのに失望せず、思いは残ると考えている。

③朝敵となり、死を目前としてもなお、**自分の生きた証**を残したかったのだろうか、和歌のことを考えている忠度には現代の私から見ればあきれられるが、そこまで入れ込めるものがあるのはうらやましい。

④自分の武人としての身を危険にさらしながら歌人としての誇りを持って行動をしていた様子が文中から強く感じられた。俊成と話し終えた後は武人として生きる覚悟を決めた**と思う**。

⑤武士なのに歌を詠むのが上手いのが意外。せつかく良い歌を詠んだのに後世まで歌で名が残らず**かわいそう**だ。

### B、俊成について

①勅撰の人である忠度の歌を（よみ人知らずという形ではあるが）勅撰集に入れたのは**勇気がいること**だと思った。忠度の行動に二度も涙するなど**心優しい人**なのかな**と思う**。

②忠度を受け入れたのが**寛容**だ**いい**と思う。弟子が自分の歌を入れてほしいと一心でやってきたことを心から喜んでい**る**と思**った**。忠度にはもう会えないだろうと思**って**最後に接しているのがよく分かった。勅撰和歌集に忠度の歌を入れたのは、**よほどの覚悟があつてのこと**だ**と思う**。

③忠度が落人になったとしても、何もとがめず家にあげた俊成と忠度の間には**深い絆**があつたんだろうと思**った**。また、都落ちした忠度にとつて、人に会うのは、歌を和歌集に入れてもらいたい**という強い思い**があつても、とても恥ずかしいことなのに、会おうと思**える**俊成は、忠度がそれだけ**信頼して慕つて**いる証だ**と思**いました。

④落人であり、朝敵である忠度を信用して家に入れてくれて、優しい人だ**と思**った。突然忠度が訪ねてきて、形見になるような歌を書いた巻き物を渡され、今生の別れを告げられた**ようなもの**で**辛**か**つた**ら**う**と思**った**。

⑤弟子のことを大切に涙もろい（？）忠度の歌の才能を認めているため、「よみ人知らず」で和歌を残していることを**も**残念が**つ**ている。

⑥特に何も感じませんでした。和歌には非常に思い入れがあつたんだろうなあ。忠度みたいに、戦で消えていく才能や作品のことを惜しく思**って**いたん**で**しょうか。当時の人だから**そ**う**で**も**な**い**ん**で**し**ょうか。「感涙」**つ**て**書**いて**あ**つたら、**な**ん**か**た**だ**の**熱**い**男**だ**け**ど、**た**ぶ**ん**忠**度**の**姿**が**生**き**様**と、**こ**れ**か**ら**の**行**く**末**に**対**し**て、**切**な**く**感**じ**たり、**辛**か**つ**たり**し**た**ん**だ**ら**う**な**と思**い**ます。歌集に載せることはできたけど、名前を書けないことを**「一番うらめしく思**つ**て**いたのは彼**だ**つ**た**の**か**な**あ**。

⑦人生のどん底にいる忠度に対して自分ができることを頑張**つ**てや**つ**つて**い**る姿、素敵だ**な**あ**と思**つた。さすが忠度の歌の師。歌**だ**けで**な**く人**間**性も優れて**い**ら**し**や**る**。だから**い**い歌が詠**め**る**の**だ。

### C、物語全体について

①一番不思議に思**つ**たのが、忠度は主役として登場し**続**けて**い**るのに、忠度の**そ**の**後**が**全**く**気**に**な**ら**な**い**と**ころ**だ**つ**た**。思**い**入**れ**が**な**い**わ**け**で**も、**簡**単**に**だ**い**たい**の**予**想**が**つ**く**わ**け**で**も**な**い**の**に、**な**ぜ**か**気**に**も**し**ょう**と**し**な**か**つ**た。忠度がい**さ**ぎ**よ**す**ぎ**る**の**か……

②どんなに名歌を詠んでも平家という社会的立場によつて千載集に名前を残せ**な**か**つ**た忠度は残念**だ**と思**つ**た。忠度と俊成の二人に共通する**和歌への強い思い**が印象**的**だ**つ**た。

③和歌に対する愛情が**こ**ん**な**に**人**の**心**を**動**か**す**ん**だ**な**と**思**つ**た。忠度と俊成のつながりは師弟関係**と**い**う**より**は**む**し**ろ、**和歌への愛**の**こ**ろ**こ**ろ**で**は**な**い**か**と思**つ**た。平家の人は優雅**だ**とい**う**が、平敦盛が笛をもつて戦に出**て**きた**の**と**ま**た**ち**が**い**、和歌派の平氏も**い**る**の**だ**な**と思**つ**た。

④忠度が命をかけて、願**つ**て**来**た**こ**と**に**対**し**、師**だ**ある俊成がその願**い**に**対**して、真摯に向き合**い**か**な**え**て**い**る**の**は**、2人の大人が**本気**で**や**つ**て**い**る**とい**う**点で素晴らしい**と思**う。

⑤忠度は平家の一門で武士でありながら歌の才能があ**つ**た。が、朝敵となつてしま**つ**た**た**め**に**せ**つ**か**く**の**歌**が**名**前**が**残**る**こ**と**な**く**載**る**こ**と**に**な**つ**て**しま**つ**た。時代が時代**と**い**え**、**良**い**物**が**正**当に**評**価**さ**れ**な**い**の**は**む**な**し**い**な**と思**つ**た。

⑥どれほどの文化人でも事情によつてはそれを捨て**な**く**て**は**な**ら**な**い**時**が**あ**る**こ**と。また、文化人同士では彼らの状況にか**か**わ**ら**ず、**そ**の**間**に**は**共**通**して愛**す**る**も**の**の**も**と**で**は**敵味方は関係**な**い**と**い**う**こ**と**。

⑦忠度と俊成卿の話だが、とても諸行無常**と**い**う**こ**と**を表現**し**て**い**る**と**思**つ**た。平家物語とい**つ**ても源氏側に味方**す**る**よ**う**な**書**か**れ**方**を**し**た**も**の**も**あ**る**が、**こ**ち**ら**は**平**家**に**同**情**す**る**よ**う**な書**き**方**だ**と感**じ**た。

⑧今と昔の考え方の違いを**実**感**し**た。歌**に**対**す**る情熱、**厳**しい**戦**い、**身**分**の**重**要**性**等**、**今**では想像**も**つ**か**な**い**よ**う**な考**え**方**も**多**か**つ**た**。しかし、平家物語が書**か**れた頃**に**は、**そ**の**一**つ**一**つ**が**と**も**大**切**で、**か**げ**が**え**の**な**い**もの**だ**つ**た**の**だ**ら**う**と思**つ**た。

⑨忠度が大友皇子と自分を重ねて詠**ん**だ**の**か**は**わ**か**ら**な**い**が**壬申の乱**に**負**け**て自**害**した大友皇子と**自**身**を**重**ね**て詠**ん**で**い**る**の**は**と**も**文**学**的**だ**と**思**う**。またそれを俊成の功績により**今**も私**た**ちがこれを詠**め**て**い**る**と**考**え**ると、**大**事**な**こ**と**は消**え**ず**に**残**る**こ**と**な**の**だ**な**と考**え**させ**ら**れた。

### D、疑問点等

①武士は誇りや名譽を一番大切にする**つ**て**い**う**の**が**ま**さ**に**、**と**い**う**感**じ**の**話**だ**つ**た。死**ん**だ**ら**何**の**意味もねえよ**つ**て**思**う**ん**で**す**け**ど**、**で**も**や**つ**ぱ**り**そ**う**い**う**の**か**つ**こ**い**い**な**も**思**い**ま**す。

②よみ人知らずで入集した歌の作者が忠度であることが広**ま**つ**た**のはこの平家物語**だ**け**の**お**か**げ**な**のか？（「山桜詠み人知らぬ者はなし」とい**う**川柳**が**あ**る**ら**し**い**の**です**が**）

.....